

教室における Person-Environment Psychology :

研究の動向と課題

学校教育開発学コース 飯田 都

Person-Environment Psychology in the Classroom: A Review and a view for future directions

Miyako IIDA

There are three stages in the history of Person-Environment (P-E) theory. First, the historical path that P-E theory has taken is outlined in this study. From this, I go on to examine conceptual definitions of person and environment, and classify them as variables. Second, right recent studies on P-E interaction are introduced. Eight studies offer useful and original concepts that effectively facilitate our understanding of P-E dynamics. Finally, I discussed the possibility of applying P-E theory, as developed in occupational organizations, to classroom settings. A number of points to be taken into careful consideration when discussing P-E Psychology in relation to the classroom are noted.

目 次

- I. Person-Environment 理論の歴史的源泉と展開
- II. 人と環境に関する概念的検討と近年の P-E 理論
 - A. 社会分析的アプローチ
 - B. 社会的・生態学的な幸福モデル
 - C. 場に関する評価的イメージ
 - D. 患者と処遇プログラムの適合モデル
 - E. person-in-environment システムモデル
 - F. ASA モデル
 - G. 実在的立論
 - H. 実生活分析
- III. 教室における P-E 心理学に向けて

I. Person-Environment 理論の歴史的源泉と展開

私たち人間は、誰もが周囲の環境から影響を受ける存在である。一見当たり前であるこの見解に至るまでには、研究者間において歴史的な議論が展開された。すなわち、人間行動の原因は、人自身の特徴によるものなのか、それとも環境に関連した要因に起因しているのか、という議論である。Person-Environment(以下、P-E)理論とは、人間行動の原因を、一元論的に追究するのではなく、行動とは人と環境の相互作用によって

決定されるとした、既存の枠組みからの脱却から誕生したものである。この意味で、P-E 理論は、第3の理論的パースペクティブであるということが出来る(Bowers, 1973; Cronbach, 1957; Meltzer, 1961)。このパースペクティブは、人と環境の相互作用が人間行動に与える効果を強調するものである。

このように、P-E 理論は、20世紀半ばに注目を集めたが、実はこれは P-E 理論の第二の時期とも言うべきもので、その源泉は、Lewin(1936)や Murray(1938)によって提起された彼らの初期の研究に辿ることができ、さらには、職業上の満足感、個人と環境のどちらか一方だけではなく、その両者の知識を通じて達成されるとした Parsons(1909)の提起にまで遡ることが出来る。彼らの功績により、20世紀を迎える世紀の変わり目以来、P-E 理論は、応用心理学に浸透してきた。

P-E 理論の第二の時期における研究は、Lewin の場理論(field theory)と Murray の双方向的な要求—圧力(needs-press)モデルに埋め込まれた相互作用論哲学に礎を置く形で展開され蓄積されてきた(Caplan, 1983; French, Rodgers, Cobb, 1974; Harrison, 1978; Holland, 1966; Moos, 1987; Pervin, 1987; Schneider, 1987)。Lewin は、人の行動は、パーソナリティーや欲求、あるいは環境刺激のいずれかひとつだけが原因ではなく、人と環境の相互作用によって生まれるものであ

るとして、行動(B) = f(人間 P, 環境 E)との公式を打ち立てた。また、Murrayは、行動を引き起こす何らかの力を要求(needs)と定義し、要求のリストを提案している。これは実現を必要とし、また環境も個人の要求の達成を促進したり妨げたりする役割を果たしうることを提起しており、第二の時期の研究は、これらの考えを基盤として発展した。

現在、P-E理論は、主に職場環境をフィールドとし、従業員のパフォーマンスやメンタルヘルスについて知見を蓄積しつつある。教育の場を対象としてもいくつかの研究が報告されているが、その数は極めて少なく、労働者としての教師に焦点を当てそのストレスを検討したもの(Ostroff & Rothausen, 1997; Pithers & Soden, 1999)、そして大学生の講座(course)における志向性と個人の特性との適合性からストレスを実証的に考察したもの(Puccio, Talbot & Joniak, 1993)に限られている。

教育の場、とりわけ教室という特殊な集団においては、その構成員は子どもであり、また対象となる環境や集団は一般的なそれとは異なる性質を帯びている。このやや特殊なフィールドに、どのようにP-E理論を展開していくことができるのか。本稿では、知見の整理とともに、この可能性と今後の展望について考察を行なうことを目的とする。

II. 人と環境に関する概念的検討と近年のP-E理論

P(人)とE(環境)には、それぞれ様々な解釈と表象化の余地があり(TABLE 1)、その扱いは、各研究者に委ねられている。Schwartz & Martin(1997)は、その捉え方や解釈のカテゴリ化を目的として、P-E理論を独自のマトリックスによって分類した。このマトリックスは、各理論家の研究上の貢献が、PおよびEのどの機能に着目したものであったかを基準としている。すなわち、Pの場合、それはa)個人、であるのか、b)集団(group)を想定しているのか、そしてEの場合、a)認識された環境、であるのか、それともb)現実の環境、を意図しているのか、に着眼し、分類を進めている。例えば、Lewin(1935, 1951)の理論は、“個人の行動は、客観的・物理的環境に対する個人の主観的な経験の結果である”ことから、

$$P(\text{個人}) \times E(\text{認識された環境})$$

と表される。対照的に、Barker(1968)は、学校にいるときは‘学校行動’、家にいるときは‘家行動’というように、個人からあるタイプの行動を引き出して

るのは状況であり、環境についてのより客観的な注意を重視していることから、

$$P(\text{集団}) \times E(\text{現実の環境})$$

と表されることになる。

また、French, J. R. P. Jr, et al.(1974)は、人と環境を‘主観的’なものとして‘客観的’なものに分類し、それぞれを識別している。すなわち、①客観的環境：人の認知とは別にして存在する物理的世界、社会的世界、②主観的環境：人の客観的環境の諸側面に関連した認知、③客観的人：人の認知とは独立して客観的に証明できる人物の特徴(欲求、価値、能力、その他の比較的恒久的な属性)、④主観的人：自身の客観的特徴(自己概念、自己アイデンティティなど)についての個人の認知、の4つの要素を見出しているのである。

また、Puccio, Talbot, & Joniak(1993)は、人と環境の適合を考察するに当たり、2つの大きな理論的方向性を指摘している。ひとつは、人の能力・コンピテンスと環境の要求・期待の一致度に焦点を当てたもの、そしてもうひとつは、人の好み・望みと環境側が用意できるチャンスとの適合である。

以上のように、実際の研究上で人および環境をどのような変数に置き換え、結果としての適合について考察を行なうのがひとつの重要な焦点となっている。

TABLE1: 人と環境の変数

人	環境
個人/集団	認識された環境/現実の環境
主観的人/客観的人	主観的環境/客観的環境
人の能力/コンピテンス	環境の要求/期待
人の好み/望み	環境側が用意できるチャンス

近年、P-E心理学においては多様な理論的アプローチが発達してきており、広範なパースペクティブを提供しているが、それぞれの理論に特異な視点がある一方で、内容的重複も見受けられる。Walsh, Craik, & Price(2000)は、様々なP-Eモデルを、その特徴から4つの行為理論に分類している。まず第一に、“人”に第一位に焦点を当てる伝統的傾向である。この種の理論は、人のモチベーション、ニーズ、満足感、目標の追究を指標としている。この傾向は、次節のA.社会分析的アプローチおよびB.社会的・生態学的な幸福モデルに該当する。第二に、行動をコントロールするコンテクストとしての刺激環境である。人は、外的環境においては、要求や出来事に対して第一に反応することが想定されている。これは、C.場に関する評価的イメージとD.患者と処遇プログラムについての適合モデルに相当する。第三に、ダイナミクスとしての、個人と環境のmatchingやfitを強調する伝統である。

次節の E. person-in-environment システムモデルおよび F. ASA モデルがその代表的研究である。第四に、解釈的、社会的構成主義ともいえる新たな独立した方向性である。社会的環境の中にいる行為者が、現在彼を取り巻く周囲や、過去の環境と行為を解釈するそのスタイルを重要な視点としている。次節の、G. 実在的立論および H. 実生活分析に相当する。以下に、代表的な 8 つの近年の P-E 理論を紹介する。

A. 社会分析的アプローチ

社会分析的理論 (socioanalytic theory) に基づき P-E 相互作用に関するパースペクティブを提供したのは、Hogan & Roberts (2000) である。彼らのパースペクティブは、職場組織における P-E fit 理論を展開した Holland (Walsh & Holland, 1992) の流れにくみするものである。行動は人と環境の機能であるとの見解であるが、この構造において、人を強調する傾向がある。行動とは、人のパーソナリティ機能によるものであり、人は相互作用の間、行動を演じる役割を果たしている。その意味で、人は相互作用のアジェンダであると位置づけられる。そして、役割とアジェンダは社会的期待を創造し、人はその期待と自らのアイデンティティーが一致するかどうかによって、ある活動を行なうか、相互作用に参加するかを決定する。人は自らのある目標 (goals) を持っており、その達成を望んでいるからこそ、社会的期待とアイデンティティーとの一致を判断し、状況に身を投じるかどうかを決定するのである。つまり、人は、他者とどのように相互作用するか、または相互作用をもつかどうかを決定するためにアイデンティティーを用いるのである。このような人のアイデンティティーや好みは時間的に安定したものであり、人は自らのアイデンティティーに依存して特定のタイプの状況を選択し、限定化するとされる。

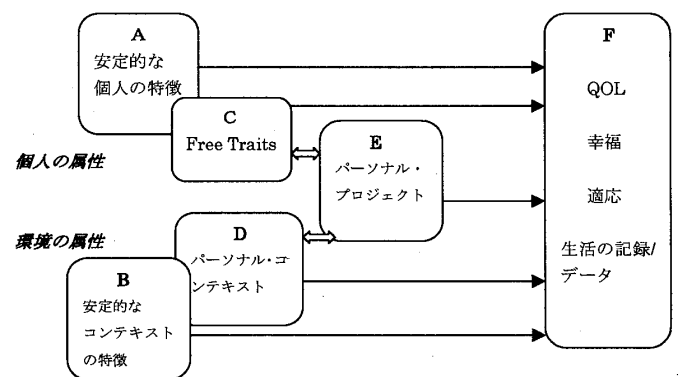
なお、人はここでは、アイデンティティーという観点から定義されており、このアイデンティティー (行為者のパースペクティブからのパーソナリティ) と対比される形で評判 (reputation) (観察者のパースペクティブからのパーソナリティ) という概念が用いられている。この両者は、研究上、問題となるトピックスによって使い分けられており、他者の行動を予測するためには評判を、そしてそれを説明するためにはアイデンティティーを使用している。アイデンティティーからは、人のモチベーション、目標、価値をうかがい知ることが可能であり、人がどのように認識されたいと考えているのかがわかる。一方、評判からは、人々がど

のように認識されているか、そして人がどのように行動するかを予測することができるのである。しかしながら、どの人の中にも、パーソナリティのこの 2 つの側面が関係し合っている点に注意が求められている。アイデンティティーと評判、そして役割という、社会的分析理論における 3 つの単位は互恵的関連性を持っている (Roberts, 1996)。多くの人は、社会的期待に気がついていればそれに従い、円滑な相互作用を演じる。しかし、社会的期待に気づいていない場合には、ストレスにさらされることになるのである。

B. 社会的・生態学的な幸福モデル

社会的生態学的パースペクティブは、人間の幸福と適応を説明し予測するに際し、パーソナル・プロジェクト (Little, 1983) という概念を用いている。パーソナル・プロジェクトの評価は PPA (Personal Projects Analysis) によってなされ、プロジェクトの意味、構造、コミュニティ (サポート)、効力感、ストレス (Little, 1989) という 5 つの理論的要因によって整理される。人が従事しているプロジェクトがこれらの点でポジティブであれば、人に適応感と幸福感をもたらすと考えられている。Little は、人間の幸福は、特性や気質の変数といった人の安定的側面と、環境のコンテキストの安定的側面によって影響されると仮定している (FIGURE 1)。人は、あるレベルにおいては、自己の好みのような比較的固定された特性によって特徴づけられる行動をとるが、また別のレベルでは、好みのようなものとは独立して、目標、プロジェクトをもち、参加するという、文化的にスクリプトされた行動パターンをとる。前者の特性を *fixed trait*、そして後者のタイプの行動を誘発する人の特性を *free trait* と呼び、この 2 つの特性を軸として P-E 相互作用を考察した。一方で、環境は、パーソナル・コンテキストの

FIGURE1: P-E 相互作用研究のための社会的・生態学的フレームワーク (Little, 2000より)



観点から考えられる。これは、個人によってユニークに解釈されたオブジェクト、状況、生活背景や環境のことを指している。Littleは他にも、*restorative niches* (自己を回復するニッチ)と*specialization niches*(個別分化したニッチ)という環境に関わる2つの概念を提起している。前者は、個人が自身にとってもっとも大切な生来的性質を回復するためのエスケープの場所である。また後者は、それぞれに個別分化された独自の方向性を持つ個人が、その傾向性を表現し価値化するための十分な機会を与えてくれる場を意味している(Little, 1972, 1976)。

方法としては、物語的記述(McAdams, 1996; Sarbin, 1986)とビデオテープ(Craik, 2000)が用いられている。ビデオテープを通じては、毎日の生活で実際に何が起きているのかの記録が得られ、物語的記述によっては、ライフストーリーにおけるコンテキストについての解釈を知ることができる。社会的・生態学的な幸福モデルにおいては、これら2つの技法を融合した idio-tape 分析が用いられている。この分析では、個人が自分の生活の理解に重要だと感じているイメージ、場面、オブジェクトを書き留めるように求める。心に場面を浮かべたり自分のパーソナル・コンテキストについてのイメージを創造する自由を与えられることによって、ビデオカメラでは技術的に困難であったり不可能であったものに焦点を持ち込むことができる。隠れたオブジェクト、過去の記憶、将来の自己、想像上の場面、捉えがたい雰囲気などが視野に入ってくる。次に、自身の生活のクオリティーと一般的な幸福における、このイメージの重要性についての評価を求める。また、イメージがどの程度生き生きとしたものであるか、そして得られたイメージが個人にとって主観的に近いのか、それとも距離があるのかを探索していく。Idio-tape 分析は、顕著なシンボル、オブジェクト、そして個人が埋め込まれている環境の属性を捉えるために、隠喩的で、個人をクローズアップしたビデオテープの技法をも併せて用いている。

C. 場に関する評価的イメージ

Nasarのパースペクティブにおいては、環境についての認知が、どのように個人の評価とその後の行動に影響を与える傾向があるのかということに第一の主眼を置いている。周囲の環境に関する認知的視覚的クオリティーは、人の行動と経験に重要な影響を与える。周囲に関する視覚的クオリティーは、楽しみや恐怖といった様々な感情を引き起こす。それゆえに人は、場

(places)や他者について推測をし、評価的なイメージを形成するとともに場に意味を与え、ある場所を避けたり、または好んで出かけたりと、自らの行動に影響を与えることが可能になるのである。このように、物理的環境に関する人の認識は、私たちの行動に影響を与える可能性がある(Nasar, 2000)。

視覚的クオリティーとは、人の生来的認知様式によるものではなく、人、環境、そして両者の絶え間ない相互作用の中から生じると考えられている。つまり、視覚的クオリティーは、社会的文化的経験、目標、期待、パーソナリティー、生物学的要因等の内外の要因によって変化する可能性が秘められたものなのである。

なお、彼は環境においては、次の6つの属性を確認している。すなわち、秩序、適度の複雑性、自然さ、保全(upkeep)、オープンさ、歴史的意味(significance)である。人は、これらの属性を備えた環境を好む傾向があり、このことから好まれる場所が暗示される。

また、環境の測定方法としては、認識された視覚的クオリティーを描写するとともに、物理的環境を評価する必要がある。それによって、環境においてその認識されたクオリティーが、人の行動にどのように影響するかをより深く理解することができるからである。具体的には、人の認識の理解のために、ERI(Environmental Response Inventory)(McKechnie, 1977)が用いられている。

D. 患者と処遇プログラムの適合モデル

Timko, Moos, & Finney(2000)は、治療施設におけるクライアントを対象とし、一般的なP-E fitモデルを提案した。このモデルでは、クライアントの機能レベルを、治療上の処遇プログラムのレベルやパフォーマンスの要求、そして構造に適合するようにしている。クライアントの認知的、心理的スキルが改善するにつれ、より大きな要求や、構造化の低い状況にも対処できるようになるであろうと想定している。このモデルでは、個人は、認知的、心理的、社会的ドメインの観点から考えられている。P-E congruence モデルを提案したことで著名なLawton(1989)と同様に、人のコンピテンス(特性)と環境の要求の適合は、好ましい行動的結果、情動的結果に帰しやすいことを示唆している。

一方で、人と同じように、社会的環境にもユニークなパーソナリティーが備わっている。このモデルでは、何よりも環境について人が抱く認識が、どのようにして人の行動に影響していくのかに関心を寄せている。

環境についての人の認識の仕方により、その環境における人の行動様式が影響されるという一般原則に基づくパースペクティブをもっている。そして環境が要求している水準が、個人のコンピテンスのレベルに照らして高すぎると認識された場合にも、低すぎると認識された場合にも、不適応行動やネガティブな情動に至るとされている。

なお、Moos は、多様性を帯びた人を取り巻く環境、社会背景についての測定法を発展させている。社会的環境または治療環境に焦点を当てており、多くの研究では SCS (Social Climate Scales ; Moos, 1994) のひとつが用いられている。これらの測定は、クライアントとスタッフメンバーの両方によって完成されるもので、どの種類の SCS も基本的フォームで統一されている。

E. person-in-environment システムモデル

Wapner & Demick (2000) は、人と環境のどちらにも重点を置かず、分析には person-in-environment という単位を用いて、いずれか一面だけ考察するのではなく、むしろ全体の部分として関係的に人と環境を考えた。このようなアプローチは、現実的生活状況の複雑性に対応し、表現することが可能である点にメリットがあり、特に、個人、集団における個人、組織における個人、そして環境システムにおける組織の概念化に成果をあげている。彼らは、統合された全体として、person-in-environment システムが作用することを想定しているのである。

適応に関しては、person-in-environment システムの状態を発達的に捉え、①分化されていない状態(人の移行は、状況的コンテキストにそのまま沿う形で特徴づけられる)、②分化され独立化した状態(物理的、対人関係的、社会文化的環境のコンテキストから人は独立している)、③分化され、葛藤のさなかにある状態(人は、物理的、対人関係的、社会文化的コンテキ

トにおいて葛藤状態にある)、④分化され、階層的に統合された状態(人は分離化し、短期的目標を長期的目標に充足させることのできる、最も発達的に進歩している状態)、の4つのステージを提案している。適応のアセスメントは、person-in-environment システム全体の構造的特徴の検討を通じて行なわれる。最適の関係には、識別され(differentiated)階層的に統合された P-E システムが含まれており、そのシステムには柔軟性、自由、自己コントロールが備わり、person-in-environment 関係の、あるモードから別のモードへとシフトする能力も見受けられるようになる。

なお、方法論的には、全体の統合を作り出すために、P と E の関係を描写すること、そしてこれらの関係の組織における変化を可能にする条件を具体的に描くことに焦点を当てている。what という内容に関わる描写と、how という原因の説明のアセスメントを結びつけて行なうことに注意を向けている。

F. ASA モデル

Schneider (1989) は、職場組織のパースペクティブから P-E fit にアプローチしている。ここで関心事となっている環境とは、文化のような非形式的なものではなく、フォーマルな職場組織であり、組織の構成要素(仕事、機能、チーム)である。環境の支配的な特徴は、その環境のメンバーの典型的特徴に依存しており、組織の創始者のパーソナリティーが、認識された環境を形作る際に強い影響を与える。

Schneider (1987) は、P-E fit の原則に基づく組織行動についてのオルタナティブな見解として、魅力-選択-減少モデル(ASA model: attraction-selection-attrition model)を提示している(参: TABLE 2)。これは、組織目標を達成するために出現した文化は、魅力、選択、減少(ASA)の3つの関連しあったダイナミックなプロセスであると考えられるものである。あるタイプの人は、

TABLE2: P-E Fit 理論と ASA 理論の対比 (Schneider et al.,2000 より)

分析のレベル	伝統的な P-E Fit 理論	ASA 理論
	個人レベル	組織レベル
問題	情動的な結果	有効性/パフォーマンスの結果
適合のよさの結果	ポジティブ ポジティブな情動 仕事の満足感 適切な社会化 調和/協調性	ネガティブ 変化に対する対応能力の欠乏 革新性の不足: 厳格さ 規範に対するチャレンジの不足 "集団思考"
"P-E"公式における"E"	社会的弱者の属性から構成されている	人の属性により構成されている

特定のタイプの組織に惹かれる。人は、高い価値のある結果を達成し満足を得るためには、自らのタイプと組織の適合が役立つものと考えているのである。組織の側はその組織に入るべきあるタイプの人を選択する。そしてその特定の組織に適合しない人が去っていくとき、減少が生じる。これらのプロセスに参加している人は、今度は反対に、組織の本質やその構造、プロセス、文化を定義する決定要因となっていくのである。しかしながら、ASAモデルは、P-E fitの否定的側面をも指摘している点で特徴的である。適合がよいことは、短期的には人にポジティブな結果をもたらすかもしれないが、より長期的スパンから考えると、適合は、思考、意思決定、そして行為の決定において同質性を生じやすく、組織的健康に有害である可能性をも示唆し、組織のライフサイクルの観点からはネガティブな結果も懸念される。同質性は、成長と調和と同僚性、そして焦点化された統一的組織の目標達成の促進に有益であるが、それは組織のライフサイクルの初期の段階においてであって、サイクル全体を視野に入れた際の問題点が指摘されている。

G. 実在的立論

人は、出来事に対して、異なったやり方で参与し、解釈し、反応する。Wicker & August(2000)はこの理由を、人が認知的シエーマや認知地図(cognitive map)に依拠して外的環境に接しているからであると考えている。このシエーマや地図には、人自身の“生活上の主要な目標”の追究の表れが込められていると考えられ、人はこの観点から分析されることになる。彼らは、cause map(Weick, 1979)の概念を用い、環境において生じた出来事の原因不確実性を減少することによって、自ら意味を見つけて解釈するプロセスが強化され、最終的には人の行動が影響される、ということを暗に想定しているのである。cause mapは、人の信条や、彼らがどのように世界と関係しているのかに基づいている。

目前に現実のものとして存在するシステムは、労働者にとって、重要な環境である。このコンテクストを理解し、P-E関係をより包括的に描き出すために、アセスメントは、環境における当事者である労働者と、状況の部外者ではあるがその背景を理解することを望んでいる分析者の、2つの方向からの見解を含んでいるべきであると考えられている。当事者の見解を、分析者のそれと対比することによって、P-E関係をより深く考察することが可能になるのである。Wicker &

Augustは、P-E関係の理論構築にあたり、自然主義的調査の妥当性を主張している。このような実在的立論(substantive theorizing)(Wicker, 1989)を行なうことにより、大規模調査では見逃すかもしれない、微細ではあるが重要な洞察を含む、綿密な調査を推奨している。

H. 実生活(lived day)分析

Craik(2000)は、前項のWicker & Augustと同様に、環境を、“行動の背景”の観点から概念化した。この概念が有用であるのは、それがP-E交互作用それぞれのストーリーの本質的な部分を表しているからである。行動の背景には、内的な規制メカニズムや、それを守るためのルールが含まれている。たとえば、われわれが学校においては学校用の行動様式をとるのは、この行動の背景として、学校という場のプログラムを保つためのルールが含まれているから、ということになる。

人と環境の交互作用を理解するため、人の実生活における行為のエピソードを分析する際には、個人の目標、計画、追究、努力、そして課題が関連していると考えられている。ゆえに、P-E交互作用を理解するには、特性-目標(goals)-行動の背景(behavior settings)の相互作用を考慮しなければならない。“人”サイドには、目標(内側のパースペクティブ)とパーソナリティー特性(外側のパースペクティブ)がある。一方で、環境は“行動の背景”という観点から定義される。人は“生活上の主要な目標”を追求するがゆえに、行動の背景は、人の行為の中に含まれていると考えられている。

操作的には、人の実生活をビデオ録画し、継続的なP-Eプロセスという観点から、特性、目標、そして行動の背景の理解を試みる。行動の背景、目標志向、特性の3つの概念は相互に関連するもので、そのコンビネーションによってより豊かな説明が生まれる。まず第一に、実生活に関する包括的記録を確保し、第二に、行動の背景、目標、追求、そして特性概念を用いて実生活についての個性叙述的な理解を得、分析を行なうことが目的となる。つまり、人の実生活で何が起きているのか、人の実生活の概念作用はどれくらい長く続くのか、という問題の考察を、エピソードのカテゴリー化を通じて行なっていくのである。人の一日中の行為の連続的流れをビデオ記録し、いつどのように特定の出来事が表されるのかを確認する。こうして、人間行為へのある概念的アプローチがどのように互いに関連しているのか、体系的に検証することが可能になるとされる。

Ⅲ. 教室における P-E 心理学に向けて

前章において、近年における P-E 心理学へのいくつかのアプローチを概観してきた。以上のように、P-E 心理学の研究的蓄積は膨大なものとなっているが、当初にも述べたように、本稿で問題としている、教室という環境における、人としての生徒や教師を直接対象とした例は極めて少ない。以下に、これまでに整理してきた P-E 心理学の知見を教室に応用する際に考慮しなければならない、その特殊性について述べる。

まず第一に、教室における“人”の特殊性である。従来の知見は、職場環境における大人である“人”を対象としたものであるが、生徒は、年齢的にも発達途上にある“人”であり、その環境認知能力もいまだ発達途上にある。また、認知的発達も、たとえ同年齢集団であっても個人差が大きい。前述のモデルにおいては、“人”自身の環境認知のクオリティーを変数として測定し、理論に組み込んでいる例が少なからず存在した。しかし、生徒を対象としたとき、発達上の理由から、“人”による認知内容のアセスメントにおいては工夫が必要であることが想定される。

第二に、Barker のように、P を“個人”ではなく“集団”として考察していく場合において、従来の知見ではビジネスを目的とした職業集団を対象としていたが、学級という教育集団においては、その目的は利潤ではなく、“人”は教育を享受することを目的に“集団”に参加しているという、集団への参加の目的性の違いが存在する。とりわけ学級においては同年齢の個人が同一の課題に取り組みパフォーマンスが評価されることから、極めて競争原理の生じやすい状況にある。このような特殊な環境の影響を生徒は受け、それぞれの目的を形成している。前述の理論において、人や環境に備わった“目的”は、P-E ダイナミクスを考察する際のキー概念となっていることを述べた。教室の場における“目的”が特殊な環境下においてどのような機能を果たしているのか、一考の価値がある。

第三に、教室における“集団”は、1~2年でその成員が入れ替わるといふ制度の下に成立しているケースが多い。当初より時間的に限定されて存立している集団であることの特殊性の考慮が求められる。職場を対象とした P-E 研究においては、半永続的性質を帯びた集団であることから、その適合性の指標のひとつとして在職期間が用いられることが少なくなかったが、教室における P-E fit の指標としてはどのような変数

を設定することが適切であるか、今後の検討が待たれるところである。

第四に、教室という“環境”は、大多数の子ども(生徒)と少数の大人(教師)が共存する場であり、職場集団とはその構成員の性質が異なっている。前章において、“人”は環境をアクティブに形成していく存在との理論的想定があることに触れてきたが、その“人”の力量には大人と子どもでは差があることが明らかである。教室環境や雰囲気醸成する“人”としての機能を、教師と生徒を同じ土俵で論じることは困難である。

第五に、教室における P-E fit を考えるときの“教師”の位置づけである。教師は、子どもにとってのひとつの“環境”であるとともに、教室環境の中に埋め込まれた“人”でもある。また、生徒集団において、仲間もまた相互に環境となり影響しあっていく存在である。2重の役割をもつ教師、そして仲間の位置づけをどう考え理論的に組み入れていくか、今後の検討課題であろう。

最後に、“人”(生徒)の成長に必要なのは、goodness of fit であるのか、適合性に何を求めるのかを再考課題としたい。goodness of fit は、教師が子どもとの関係における問題や、子どもと教室の関係性を捉える上で有益な視点ではあるが、ASA モデルにおいても指摘があったように、適合性の追求によって、教室環境の中の異質性に、同質性への変容を促すことが目的とされるべきではないであろう。集団における同質性や集団思考は、決して組織的健康にプラスに働くものではない。現在目の前にある、人(生徒)-環境(教師)の相互作用には集団的終末の時間が近い未来に迫っており、人(生徒)は次の新たな未知の環境へと必ず移動することになる。むしろ、教室で求められているのは、今後遭遇する異なる環境に対して、うまくインタラクトしていく能力を育むことなのではないであろうか。

教室環境は、成員から影響されて形作られる側面がある一方で、学校制度の階層性の中に組み込まれた“環境”でもあることから、より大きな権限を持つ組織からの絶えざる決定事項を引き受けている場でもある。必然的に、個人の“気づき”によって変えられるダイナミクスとそうでないものが存在することになる。教室における P-E 心理学を展開していく際には、今後、上記のような諸点への配慮と考察が求められるであろう。

(指導教官 秋田喜代美教授)

【引用文献】

- Barker, R. G.(1968) *Ecological Psychology: Concepts and methods for studying human behavior*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Bowers, K. S.(1973) Situationism in psychology: an analysis and critique. *Psychological Review*, 80, 307-336.
- Caplan, R. D.(1983) Person-environment fit: past, present and future. In C. L. Cooper(Ed), *Stress Research: Issues for the Eighties*. New York: John Wiley & Sons.
- Craik, K. H.(2000) The lived day of an individual: A Person-Environment perspective. In Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Cronbach, L. J.(1957) The two disciplines of scientific psychology. *American Psychologist*, 12, 671-684.
- French, J. R. P. Jr., Rodgers, W. & Cobb, S.(1974) Adjustment as person-environment fit. In G. V. Coelho, D. A. Hamburg & J. E. Adams(Eds), *Coping and Adaptation*. New York: Basic Books.
- Harrison, R. V.(1978) Person-environment fit and job stress. In C. L. Cooper & R. Payne(Eds), *Stress at Work*. New York: Wiley.
- Hogan, R. & Roberts, B. W.(2000) A socioanalytic perspective on Person- Environment Interaction. In Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Holland, J. L.(1966) *The Psychology of Vocational Choice: A Theory of Personality Types and Model Environments*. Waltham, Mass. Blaisdell.
- Lawton, M. P.(1989) Behavior-relevant ecological factors. In Schaie K. W. & Schooler, C.(Eds.), *Social structure and aging: Psychological processes*. Hillsdale, Nj: Lawrence Erlbaum Associates.
- Lewin, K.(1936) *Principles of Topological Psychology*. New York: McGraw-Hill.
- Lewin, K.(1951) *Field theory in social science*. New York: Harper & Row.
- Little, B. R.(1972) Psychological man as scientist, humanist and specialist. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6, 95-118.
- Little, B. R.(1976) Specialization and the varieties of environmental experience: Empirical studies within the personality paradigm. In Wapner, S. Cohen, S. B., & Kaplan, B.(Eds.), *Experiencing the environment*. New York: Plenum.
- Little, B. R.(1983) Personal projects: A rationale and method for investigation. *Environment and Behaviour*, 15, 273-309.
- Little, B. R.(1989) Personal projects analysis: Trivial pursuits, magnificent obsessions, and the search for coherence. In Buss, D. & Cantor, N.(Eds.), *Personality Psychology: Recent trends and emerging directions*. New York: Springer-Verlag.
- McAdams, D. P., Hoffman, B. J., Mansfield, E. D., & Day, R. (1996) Themes of agency and communion in significant autobiographical scenes. *Journal of Personality*, 64, 339-377.
- McKechnie, G. E.(1977) The environmental response inventory application. *Environment and Behavior*, 9, 255-276.
- Meltzer, L.(1961) The need for a dual orientation in social psychology. *Journal of Social Psychology*, 55, 43-48.
- Moos, R. H.(1987) Person-environment congruence in work, school, and health care settings. *Journal of Vocational Behaviour*, 31, 231-247.
- Moos, R. H.(1994) *The social climate scales: A user's guide*(2nd edition). Palo Alto, CA: Consulting Psychologists Press.
- Murray, H. A.(1938) *Explorations in Personality*. New York: Oxford University Press.
- Nasar, J. L.(2000) The evaluative image of places. In Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Ostroff, C.(1997) The moderating effect of tenure in person-environment fit: A field study in educational organizations. *Journal of Occupational and Organizational Psychology*, 70, 173-188.
- Parsons, F.(1909) *Choosing a vocation*. Boston: Houghton Mifflin.
- Pervin, L. A.(1987) Person-environment congruence in the light of the person-situation controversy. *Journal of Vocational Behaviour*, 31, 222-230.
- Pitchers, R. T. & Soden, R.(1999) Person-environment fit and teacher stress. *Educational Research*, 41, 51-61.
- Puccio, G. J. & Talbot, R. J. & Joniak, A. J.(1993) Person-environment fit: using commensurate scales to predict student stress. *British Journal of Educational Psychology*, 63, 457-468.
- Roberts, B. W.(1996 August) An alternative perspective on the relation between work and psychological functioning: The reciprocal model of person-environment interaction. Paper presented at the 104th Annual Convention of the American Psychological Association, Tronto, Canada.
- Sarbin, T. R.(Eds.)(1986) *Narrative Psychology: The stored nature of human conduct*. New York: Praeger.
- Schneider, B.(1987) The people make the place. *Personnel Psychology*, 40, 437-454.
- Schneider, B.(1989) E=f(P, B): the road to radical approach to person-environment fit. *Journal of Vocational Behaviour*, 31, 353-361.
- Schwartz, J. L. & Martin, W. E., Jr.(1997) Ecological psychology theory; Historical overview and application to educational ecosystems. In J. L. Schwartz & W. E. Martin, Jr. (Eds), *Applied ecological psychology for schools within communities*.(pp.3-27). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Timko, C., Moos, R. H., & Finney, J. W.(2000) Models of matching patients and treatment programs. In Walsh, W. B., Craik, K. H.

- & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Walsh, W. B., & Holland, J. L.(1992) A theory of personality types and work environments. In W. B. Walsh, K. H. Craik, & R. H. Price(Eds.) *Person-environment psychology: Models and perspectives*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(2000) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wapner, S. & Demick, J.(2000) Person-in-environment psychology: A holistic, developmental, system-oriented perspective. In Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Weick, K. E.(1979) *The social psychology of organizing*(2nd ed.). Reading, MA: Addison-Wesley.
- Wicker, A. W.(1989) Substantive theorizing. *American Journal of Community Psychology*, 17, 531-547.
- Wicker, A. W. & August, R. A.(2000) Working lives in context: Engaging the views of participants and analysts. In Walsh, W. B., Craik, K. H. & Price, R. H.(Eds.) *Person-Environment Psychology: New directions and perspectives*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.